1	阿部俊夫(2007)小流域における渓畔林の喪失とサクラマス幼魚の生息環境悪化, 日林誌89(2), 85-91	サクラマス幼魚に対する渓畔林喪失の影響を調査し、北海道北部の森林小流域と草地化された小流域において生息場所と生育密度などが比較され、夏季には最高水温が、初冬には倒流木カバー量がサクラマスの生息密度に最も影響を与える変量であることを示している。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjfs/89/2/89_2_85/_article/-char/ja/
2	可児藤吉(1944)渓流性昆虫の生態学, 可児藤吉全集, 思索社, 3-91	河川の蛇行と河川形態である瀬と淵に着目した「河川形態型」を提唱している。	なし
3	河口洋一・中村太士・萱場祐一(2005)標津川下流域で行った試験的な川の再蛇行化に伴う魚類と生息環境の変化, 応用生態学7(2), 187-199	人為的に直線化された河川、及び環境修復を目的に再蛇行化された河川で、河道の物理環境及び魚類の生息環境を比較する調査が行われ、再蛇行化された河川において河道平面形状の多様化、及び魚類の個体数の増加が確認されたことを示している。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/ece/7/2/7_2_187/_article/-char/ja/
4	北野文明・中野繁・前川光司・小野有五(1995)河川型オショロコマの流程分布に対する水温の影響および地球温暖化による生息空間の縮小予測, 野生生物保護1(1), 1-11	将来の気温が1～4℃上昇する各シナリオにおいて将来の河川水温を予測し、オショロコマの分布下限が高水温期の平均最高水温16度と仮定した場合には、オショロコマ個体群の流程分布が現在の25～74%減少することを報告している。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/wildlifeconsjp/1/1/1_KJ00003136252/_article/-char/ja/
5	国土交通省 河川環境課(2013)河川における外来種対策の事例集 資料編, 171-173	河川において外来種対策を実施する場合の利活用可能な事例集として、外来魚の生息実態に関する現状把握、ならびに駆除方法についての効果的・効率的な手法を整理している。	http://www.mlit.go.jp/river/shishin_guideline/kankyo/gairai/jirei.html
6	国土交通省　水文水質データベース		http://www1.river.go.jp/
7	佐藤弘和・永田光博・鷹見達也・柳井清治(2001)河畔林の被陰がサクラマスの成長に及ぼす影響―夏期河川水温と指標とした解析―, 日林誌83(1), 22-29	河畔林の被陰割合が異なる調査区間において、被陰率と水温およびサクラマス当歳魚の成長について調査を行い、河畔林の被陰が少ない区間では日最高水温と日水温較差が大きい傾向があることに加え、河川水温が24℃以上になるとサクラマス幼魚の成長が停滞することを示している。	https://ci.nii.ac.jp/naid/110002830184
8	島谷幸宏・小栗幸雄・萱場祐一(1994)中小河川改修前後の生物生息空間と魚類相の変化, 水工学論文集38, 337-344	中小河川改修により直線化された河川を対象に調査を行い、改修後では河道の単調化、河岸植物帯の減少、低流速域の消失、生物相の変化等が見られることを報告している。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/prohe1990/38/0/38_0_337/_article/-char/ja
9	内藤淳也, 角哲也, 竹門康弘(2012)冷水性淡水魚類生態に適した河川水温環境に関する研究, 京都大学防災研究所年報, 第55号	河川水温の予測モデルを用いて計算を行い、九頭竜川におけるサクラマスの温度障壁を超える水温の発生が検証されたが、発電所からの放流水の水温と流量が現在のまま保たれる場合にはその影響がないことを示している。また、河川の縦断方向に加え、瀬・淵、湧水の流入等の河川地形も組み合わせて検討し、サクラマスの選好する環境を造成・保全することが重要であるとしている。	https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/161816
10	長坂晶子・杉山(杉本)幸穂(2010)北海道内の小河川における夏季最高水温の推定と河畔林の効果, 北海道林業試験場研究報告, 第47号	夏季最高水温の推定モデルを作成し、複数の説明変数による解析を行い、観測点から上流の河畔林に覆われていない河道区間の長さ、標高で補正した8月の最高気温、森林におおわれた支流の流入の有無、地質を取り入れたモデルが採択されている。森林に覆われた支流が流入する場合、回帰式の傾きが小さくなり冷却効果があることが示されている。	https://www.hro.or.jp/list/forest/research/fri/kanko/kenpo/kenpo47.htm
11	福島路生・亀山哲(2006)サクラマスとイトウの生息適地モデルに基づいたダムの影響と保全地域の評価, 応用生態工学8(2), 233-244	ダムによる流域分断がサクラマスの分布に与える影響を調べ、ダムの建設から30年以上経過している場合にサクラマスの生息確率が著しく低下することを報告している。30年以上前に建設された旧式ダムは魚道の設置がなく、あるいは設置されていても魚道として機能しておらず、ダムの建設により生息地が分断されたうえに、長きにわたり回遊行動が阻害されたことが原因と示唆している。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/ece/8/2/8_2_233/_article/-char/ja
12	眞山紘(2004)さけ・ます類の河川遡上生態と魚道, さけ・ます資源管理センターニュースNo.13, 1-7	環境変化はサクラマスの遡上活動にも作用しており、その中でも特に照度や流量(流速)の影響が大きいことを示している。	http://salmon.fra.affrc.go.jp/kankobutu/salmon/salmon.htm#13
13	宮内康行 (2011) 越夏環境の保全・改善及び造成技術の開発, 河川の適用利用による本州日本海域サクラマス資源管理技術の開発報告書, 独立行政法人水産総合研究センター さけますセンター, 33-54	サクラマス親魚の越夏環境の解明のため、越夏時期の親魚の追跡、中・小規模河川の越夏場所の調査を行っている。これらの調査の結果から、夏場の親魚の生態や遊泳パターン、及び親魚が好む淵の特性等が特定されている。	なし
14	柳井清治(1999)サケ科魚類の生息と水辺林の機能―水辺環境の再生への取り組み―, 森林科学26	河川の高水温を抑制するには、樹冠による被陰の存在が重要であることに加え、堤高の高さなどの物理環境がサクラマスの遡上に影響を及ぼすことを報告している。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjsk/26/0/26_KJ00001916387/_article/-char/ja/
15	山形県県土整備部(2017)平成29年度山形県の県土整備	山形県県土整備部が発行する報告書で、平成29年度の山形県内の土地利用、下水、道路、河川事業等をとりまとめている。	https://www.pref.yamagata.jp/ou/kendoseibi/180001/kendoseibibugaiyou/h29.html
	山崎憲人・宮島重保・藤田幸雄・仮谷伏竜・坂本健太郎・田子泰彦 (2009), サクラマスが増える河川環境を目指す神通川自然再生への検討, 河川技術論文集, 第15巻	富山県の神通川において、サクラマス成魚期の越夏環境の生息環境調査が行われ、夏季におけるサクラマスの移動状況等が報告されている。また、護岸及び根固め工事に合わせて実施された水中カバーの試験造成の利用状況を把握するためのモニタリング結果から、サクラマスを含む多様な魚種による利用が確認されている。	http://scholar.google.co.jp/scholar_url?url=http%3A%2F%2Flibrary.jsce.or.jp%2Fjsce%2Fopen%2F00906%2F2009%2F15-
16	用田悠介・鹿野雄一・阿部信一郎・井口恵一朗・棗田孝晴(2018)河川工作物による環境改変が淡水魚類群集に及ぼす影響, 応用生態工学21(1), 17-28	堰の上限区間において魚類調査を行い、堰上の魚類の多様度が堰下よりも有意に低いことが示されている。また、堰の存在が、調査で捕獲された全魚種および通し回遊魚の多様度に有意な負の効果があることも報告され、これらが堰の落差による上流への移動阻害および生息環境の変化に起因することを示唆している。	https://www.jstage.jst.go.jp/article/ece/21/1/21_17/_article/-char/ja/
17	Edo K.and Suzuki K.(2003) Preferable summering habitat of returning adult masu salmon in the natal stream. Ecological research 18:783-791	サクラマス親魚の越夏場所には、最大水深、流速、およびカバー率が重要であることが示されている。	https://link.springer.com/article/10.1111/j.1440-1703.2003.00597.x

18	Piani, C., Haerter, J. O. and Coppola, E.（2010）Statistical bias correction for daily precipitation in regional climate models over Europe, Theoretical and Applied Climatology., Vol. 99, 187-192	極値統計（日最高気温の両端の分布を観測値に近く干せされる手法）に関する論文。	